

# 子ども版の自尊感情尺度作成の試み

—選択理論心理学をベースとして—

薬師寺 明日香\*

Attempt of self-esteem scale of child version

—Based on selective theory psychology—

The term “self-esteem” or “self-affirmation” which is one of the self-concepts at educational sites and home education is also used for confidence in themselves, confidence in others, self-understanding in educational setting and home education. We regard self-esteem and self-affirmation in this research as synonymous concepts, unify them with “self-esteem” and define “feeling to evaluate themselves positively”. In this research, “love-desire of affiliation” and “power affiliation” out of 5 basic desires of selection theory psychology considered to be connected with self-esteem (survival, love, power, freedom, fun). The purpose of this study was to investigate the reliability and validity of 16 items in total “including 3 items added to 13 items of Kakitani& Inoue (2011) prepared based on”. The survey was conducted from the beginning of June 2017 to the end of July, for 339 university students and graduate students in Tokushima and Ehime prefectures. We also examined the relationship between the self-affirmation scale created by Higuchi and Matsuura (2002b) and Japanese version RSES-J by Mimura & Girffiths (2007). As a result of the factor analysis, it was shown that the school version self-esteem scale is a three factor structure. It was also shown sufficiently in the study of reliability and validity.

## 1. 問題と目的

近年、教育現場や家庭教育において自己概念の一つである「自尊感情」や「自己肯定感」という言葉に着目し、自尊感情や自己肯定感を育むことは、教育現場や家庭教育において必要であると言われてきている。自尊感情と自己肯定感は、類似した概念であり、本研究では同義の概念として捉え、「自尊感情」で統一し、「自分自身を肯定的に評価する気持ち」と定義する。

教育現場や家庭教育における児童生徒の自尊感情を高めることは、家族や先生や友達などの周囲の人々との良い人間関係の構築に結び付いたり、周囲とのコミュニケーションの向上に結び付いたりすると考える。しかし、自尊感情を測定する質

問紙の既存のものでは成人以上が対象になっているものが多く、小学校や中学校を対象とした児童生徒版の自尊感情を測定する質問紙は少ない。また、教育現場や家庭教育で使用するには児童生徒がわかりやすい質問内容で回答しやすいものが望ましいと考える。学校版自尊感情尺度ができ、子どもの自尊感情が測定できるようになることで、自尊感情の高低に応じた関わりができるようになると考えられる。

これまでの研究では、樋口・松浦(2002a)が、18歳以上の男女502名を対象に、自己肯定感尺度を仮説的に定義し、自己肯定感の構成概念を組み立て、自己肯定感尺度の構成する項目の選定と検討および尺度の作成を目的とした研究を行った。仮説的に作成した自己肯定感構成項目104問について因子分析を実施し、“自律”、“自信”、“信頼”、“過去受容”の4因子を抽出し、得られた4因子

\* 鳴門教育大学大学院学校教育研究科

解を基に、4下位尺度20項目からなる自己肯定感尺度を作成した。その後、樋口・松浦(2002b)は、18歳以上の男女277名を対象に新たに作成した4下位尺度20項目の自己肯定感尺度の妥当性と信頼性の検証を目的とした研究を行った。尺度の信頼性および4つの妥当性(因子的妥当性、構成概念妥当性、併存的妥当性、弁別的妥当性)を検証し、十分な信頼性および妥当性があることを確認した。

また、自尊感情を測定する際に最も多く用いられている尺度にRosenberg自尊感情尺度(Rosenberg Self Esteem Scale; RSES)がある。内田・上埜(2010)は、Rosenberg自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討として、Mimura&Girffiths(2007)による日本語版RSES(RSES-J)を用いて、大学生329名に実施し、尺度のさらなる精神測定特性について検証した。因子分析の結果から、1因子構造であることが示され、 $\alpha$ 係数、再テスト信頼性によってRSES-Jの信頼性が示された。また、RSES-JとBCSS、ATQ-R、ハッピネス尺度との関連からRSES-Jの収束的妥当性が確認できた。ここから、Mimura&Girffiths(2007)による日本語版RSES-Jは自尊感情を測定する尺度としての信頼性、妥当性を備えていることが示唆された。

柿谷・井上(2011)は、選択理論心理学(William Glasser, M.D.; 2000)における基本的欲求に着目し、自尊感情(柿谷・井上; 2011は自己肯定感としている:以下同様)尺度を作成している。この尺度は、選択理論心理学を活かして子どもの自尊感情を育むことに着目し、学校現場や家庭教育でも簡易に使える質問項目として作成された。柿谷・井上(2011)は、問題を抱えた子どもの共通点は自尊感情が低いということであり、自尊感情が低い状態では、意欲も湧かず健康にも悪影響がでると考えている。選択理論心理学では基本的欲求を5つ(生存、愛・所属、力、自由、楽しみ)としている。人は誰しも基本的欲求を持ち、それを満たすことで良い気分を得ることができるとし、特に身近で重要な人と良い人間関係を築くことで、

愛されているという「愛・所属の欲求」と、人として存在価値を認められているという「力の欲求」が自尊感情と結びつくことを指摘し、行動や思考を決定する基本的欲求に基づいた自尊感情尺度を作成している。この尺度は、学校版つまり小学校・中学校での使用を目的にしており、小学生でも回答可能な内容となっている。しかし、子どもの自尊感情の高さを事前に知り、予防的に人間関係の関わりを改善を図れるなど、家庭教育にもその活用範囲や利用価値が高いにもかかわらず、これまでのところ質問項目の信頼性・妥当性の検証が十分行われていない。そこで、本研究では柿谷・井上(2011)の質問項目をベースに新たな質問項目を加え、より多くの教育現場や家庭教育において活用できる小学生や中学生を対象とした自尊感情尺度を作成したいと考えた。

このように先行研究から、小学生・中学生を対象とした自尊感情尺度は少なく、本研究で作成する自尊感情尺度の妥当性・信頼性を測定する既存の尺度は見当たらなかった。そのため、本研究で作成の自尊感情尺度は成人にも通用すると仮定し、成人向けの既存の自尊感情尺度と本研究で作成の自尊感情尺度について信頼性・妥当性を検討することで、本研究で作成の尺度自体の安定性を測定することができるのではないかと考えた。つまり、小学生・中学生を対象に調査を行う前に本研究の使用尺度の安定性を測るために、まず大学生・大学院生を対象に調査を行う。以上のことから、本研究では、その第一歩として、大学生および大学院生を対象に質問紙調査を行い、本研究で作成した学校版自尊感情尺度について信頼性・妥当性の検討を行うことを目的とする。

## 2. 方法

学校版自尊感情尺度を構成する項目の検討・選定および信頼性・妥当性の検証を目的とした。柿谷・井上(2011)が作成した13項目と本研究で作成した3項目からなる16項目の質問紙を用いて、徳島県内と愛媛県内の大学生および大学院生、合

計339名（男性37名、女性302名、平均年齢19.9歳）を対象に調査を実施した。

実施時期は、2017年6月上旬から7月下旬にかけて実施した。自尊感情尺度の信頼性を検討するため、Cronbachの $\alpha$ 係数の算出による内的整合性の検討と、再テスト法による級内相関係数の検討を行った。再テスト信頼性の検討においては質問紙を実施した339名のうち39名（男性13名、女性26名、平均年齢28.4歳）に3週間から4週間の間隔をあげ、再テストを実施した。データの照合には学籍番号を使用した。また、自尊感情尺度の妥当性を検討するため、樋口・松浦（2002b）が作成した、4下位尺度20項目からなる自己肯定感尺度、Mimura&Girffiths（2007）による日本語版RSES-Jの10項目を用い、併せて調査した。

回答の選択肢には、「あてはまらない＝1点」、「ややあてはまらない＝2点」、「どちらでもない＝3点」、「ややあてはまる＝4点」、「あてはまる＝5点」までの5件法を用いた。

なお、質問項目を作成する際に選択理論心理学に基づいた基本的欲求を足掛かりに質問項目を作成した。本研究における新たな質問項目は、選択理論心理学における基本的欲求の5つ（生存、愛・所属、力、自由、楽しみ）の中の「愛し愛されたい、仲間の一員でいたい」という愛・所属の欲求および「認められたい、達成したい、人の役に立ちたい」という力の欲求の2つの欲求に着目し、愛・所属、力の2つの欲求と自尊感情に関わりがあると仮定し、本研究で新たに作成した3項目を加えた。本研究で使用した16項目についてTable 1に示す。本研究で新たに作成した3項目については、Table 1の14、15、16の3つである。

本研究における倫理的配慮として、この尺度の使用について作成者の井上（2011）には事前に承諾を得た。

### 3. 結果

16項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化および累積寄与率が50%を超え

ていることを条件として3因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった5項目を分析から除外し、再度、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンを因子ごとに因子負荷量と共通性をTable 2に示す。また、最終的な因子分析の結果、CFI=.948、RMSEA=.085と許容できる値が得られた。

第1因子は4項目で構成されており、「自分のことが好き。」「自分にはよいところがあると思う。」「何かやってみようと思ったとき、たぶんうまくいくと思うほう。」などの認められたいや達成したい内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「肯定・達成」因子と命名した。

第2因子は3項目で構成されており、「先生から、大切にされていると思う。」「先生に、自分の気持ちや願いを言える。」「友達に、自分の気持ちや願いを言いたい言える。」と、学校の先生に大切にされていることや素直に気持ちを言える内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「接近・承認」因子と命名した。

第3因子は4項目で構成されており、「休み時間は、友達といたいと思う。」「どちらかと言えば、ひとりであるより友達といるほう。」「大学で、仲良くしてくれる友達がいる。」など、人との関係や人との間の情愛に関した内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「友好・友情」因子と命名した。

本研究で作成した学校版自尊感情尺度の信頼性の検討するために各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出したところ、「肯定・達成」で $\alpha$ =.78、「接近・承認」で $\alpha$ =.74、「友好・友情」で $\alpha$ =.68と十分な値が得られた。また、徳島県内の大学生および大学院生39名を対象として、再テスト法を実施した。

1回目と2回目のテストの相関係数を計算した結果をTable 3に示す。

Table 3のから1回目と2回目のテストの間に、

Table 1 本研究で使用した学校版自尊感情尺度16項目

1. 大学で、仲良くしてくれる友達がいる。
2. 友達に、自分の気持ちや願いをだいたい言える。
3. 先生から、大切にされていると思う。
4. 先生に、自分の気持ちや願いをだいたい言える。
5. 家族から、大切にされていると思う。
6. 家族に、自分の気持ちや願いを言える。
7. 「自分にはよいところがある」と思う。
8. 「新しいことをいろいろ知りたい気持ち」が強い。
9. 運動が好き。
10. 大学で勉強していることが、だいたいわかる。
11. どちらかと言えば、運がいいほうだと思う。
12. 自分のことが好き。
13. 何かやってみようと思ったとき、たぶんうまくいくと思うほう。
14. 休み時間は、友達といたいと思う。
15. どちらかと言えば、ひとりであるより友達といるほう。
16. 周りの人からどう思われているのか気になるほう。

Table 2 項目別の因子負荷量および共通性

項目	因子負荷量			共通性
	1	2	3	
12. 自分のことが好き。	0.87	-0.07	0.00	0.69
7. 「自分にはよいところがある」と思う。	0.67	0.09	0.08	0.56
13. 何かやってみようと思ったとき、たぶんうまくいくと思うほう。	0.65	0.02	-0.07	0.42
11. どちらかと言えば、運がいいほうだと思う。	0.60	-0.05	-0.08	0.32
3. 先生から、大切にされていると思う。	-0.04	0.84	-0.13	0.60
4. 先生に、自分の気持ちや願いをだいたい言える。	0.00	0.77	-0.07	0.56
2. 友達に、自分の気持ちや願いをだいたい言える。	0.03	0.46	0.36	0.51
14. 休み時間は、友達といたいと思う。	-0.01	-0.04	0.87	0.72
15. どちらかと言えば、ひとりであるより友達といるほう。	0.04	-0.08	0.77	0.56
1. 大学で、仲良くしてくれる友達がいる。	0.00	0.21	0.48	0.36
16. 周りの人からどう思われているのか気になるほう。	-0.15	-0.15	0.42	0.15

有意な正の相関が見られた ( $r=.94, p<.01$ )。相関の強さは強程度といえる。したがって、 $\alpha$ 係数および再テスト法の結果より、本研究の自尊感情尺度は十分に信頼性が示されたといえよう。

本研究の尺度の妥当性について2人の心理学の専門家が質問項目の内容が妥当であることを検討し、内容が妥当であることを確認した。さらに、基準関連妥当性の検討として、樋口・松浦 (2002b) が作成した、4下位尺度20項目からなる自己肯定

感尺度とMimura&Girffiths (2007) による日本語版RSES-Jの10項目からなる自尊感情尺度の既存している質問項目と柿谷・井上 (2011) が作成した13項目と本研究で作成した3項目からなる学校版自尊感情尺度16項目との相関分析の結果をTable 4に示す。

Table 4から、樋口・松浦 (2002b) による自己肯定感尺度と本研究で作成した学校版自尊感情尺度との間の相関の強さは中程度ではあるが、有

Table 3 本研究による自尊感情尺度の再テスト法における得点結果

平均値 (標準偏差)		相関係数
1回目	2回目	
3.82 (.61)	3.77 (.70)	.94**
		*p<.05    **p<.01

Table 4 各尺度の平均値 (M), 標準偏差 (SD) と尺度間相関

	①	②	③
①樋口・松浦 (2002b) による自己肯定感尺度	—	.64**	.50**
②Mimura&Girffiths (2007) による日本語版RSES-J		—	.54**
③本研究で作成した学校版自尊感情尺度			—
M	3.07	2.94	3.72
SD	0.51	0.65	0.53
		*p<.05	**p<.01

意な正の相関が見られた ( $r=.50, p<.01$ )。同様に、Mimura&Girffiths (2007) による日本語版RSES-Jと本研究で作成した学校版自尊感情尺度との間の相関の強さは中程度ではあるが、有意な正の相関が見られた ( $r=.54, p<.01$ )。つまり、本研究における基準連関妥当性が十分に示された。このことから、本研究による自尊感情尺度の妥当性は十分に示されたといえよう。

この結果を総合的に判断して、本研究で作成した学校版自尊感情尺度は十分な信頼性および妥当性があると示された。

#### 4. 考察

本研究の目的は、学校版および家庭版の自尊感情尺度の作成を最終的な目的とし、その第一歩として、大学生および大学院生を対象に質問紙調査を行い、選択理論心理学における基本的欲求である「愛・所属の欲求」と「力の欲求」が自尊感情と結びつくことを指摘した柿谷・井上 (2011) が作成した自尊感情尺度と本研究で新たに作成した質問項目の学校版自尊感情尺度の信頼性・妥当性の検証を行うことであった。そこで、大学生および大学院生を対象に質問紙調査を実施し、尺度の

因子構造および信頼性・妥当性の検討を行った。

その結果、自尊感情の構成概念および選択理論心理学をベースに、得られた3因子解を最終的に「肯定・達成」「接近・承認」「友好・友情」とした。本研究における自尊感情尺度において、信頼性・妥当性ともに十分に示されていることが示唆された。選択理論心理学における基本的欲求の「愛・所属の欲求」と「力の欲求」を満たすことは、自尊感情を高めることに結び付くと考える。つまり、選択理論心理学の基本的欲求5つの中の「愛・所属の欲求」と「力の欲求」は自尊感情と結びつきがあることが示唆され、本研究で作成した学校版自尊感情尺度は尺度として有効的であると考えられる。

一方、本研究では自尊感情において重要な構成概念であろう家族に関する項目が除外された。これは、本研究の調査対象者が大学生および大学院生だったためではないかと考える。本研究では質問紙項目のベースとしている選択理論心理学において、人は誰しも基本的欲求を持ち、それを満たすことで良い気分を得ることができるとし、本研究における自尊感情は、特に身近で重要な人と良い人間関係を築くことで、満たされるのではない

かと考えている。つまり、本研究で対象にした大学生および大学院生は、家族のもとを離れて生活していることやある程度自立していることから、家族が身近にいないことで重要な人と良い人間関係を築くということに家族が当てはまらず、家族に関する項目に一定の因子負荷量が得られなかったのではないだろうか。

本研究の結果から、本研究の最終目標である子ども版自尊感情尺度の作成であるが、本研究で作成の自尊感情尺度の質問紙項目のベースとしている選択理論心理学において自尊感情は、特に身近で重要な人と良い人間関係を築くことで、満たされるのではないかと考えている。つまり、大学生・大学院生と小学生・中学生では、特に身近で関わる人間や環境も多様であることから、使い分けが必要であることが示唆されたと考えられる。

本研究の最終的な目的である学校版自尊感情尺度を作成することで教育現場や家庭教育において、自尊感情を測定することができる。家庭教育において、子どもの人間形成する上で、家族との人間関係や学校教育との関連がいかにあるべきかを考えなければならない。本研究における学校版自尊感情を学校現場や家庭教育に用いることで、子どもの自尊感情を育むことができるようになり、子どもの人間形成をする上での足掛かりになるのではないかと考える。

今後の課題として、本研究の最終的な目的である学校版および家庭版の自尊感情尺度の作成する際には小学生および中学生を対象に調査を行う必要があることが挙げられる。本研究の調査対象である大学生および大学院生では、家族に関する項目が省かれたが、小学校および中学校の大部分の児童生徒は家族と生活しているため、家族に関する項目を再度項目に加えて検討する必要があるのではないだろうか。子どもを取り囲む環境における身近で重要な人の中に学校では先生や友達、家庭では家族が自尊感情を育む重要な対象と考えられるからである。このことから、小学生および中学生を対象に調査を行う際に再び家族の項目を入

れた質問紙項目の検討を実施したい。

また、大学生・大学院生を対象に調査を行ったことから、本研究では成人を対象とした自尊感情尺度の安定性を図ることはできたが、子ども版を作成するためには、小学生・中学生を対象に調査を行い、本研究で作成した自尊感情尺度の安定性をより確実なものにしていくことが必要であると考える。

## 5. 謝辞

本論文の作成にあたり、ご指導いただきました鳴門教育大学大学院教授浜崎隆司先生に深く感謝申し上げます。また、調査にご協力いただきました皆様に、心より御礼申し上げます。

## 引用・参考文献

- 樋口善之・松浦賢長 自己肯定感の構成概念および自己肯定感尺度の作成に関する研究. 母性衛生, 43 (3), 2002a. 500-504.
- 樋口善之・松浦賢長 新たに作成した自己肯定感尺度の妥当性と信頼性に関する研究. 母性衛生, 43 (4), 2002b. 505-512.
- William Glasser, M.D. Reality Therapy in Action. New York 2000. (ウイリアム・グラッサー, E.A. 柿谷正期・柿谷寿美江 (訳) 15人が選んだ幸せの道 アチーブメント出版 2000.)
- 柿谷正期・井上千代 選択理論を学校に—クオリティ・スクールの実現に向けて— ほんの森出版 2011.
- 上田知宏・上埜高志 Rosenberg自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討—Mimura&Griffiths訳の日本語版を用いて—. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58 (2), 2010. 257-266.
- Mimura, C. &Griffiths, P. A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. J Psychosomatic Res, 62, 2007, 589-594.